

鳥貝につける苗族刺繡の技法、紋様、色の整理

中国貴州省黔東南州雷山県西江鎮の鳥貝を中心として

楊梅竹（山口大学）

苗族の刺繡について、刺繡技法、刺繡紋様、色などに関する研究は少なくはない。しかし苗族の刺繡の技法、紋様および色を一枚の衣服という、極めて単純な視点から考察する研究は決して多いとは言えないのが現状である。これまで先行研究においては、服飾、刺繡を東部、西部、中部の方言区に分け、更に各方言区の代表的な服飾を紹介しているが、それは刺繡の地域性の研究においては十分ではなく、むしろ本来、材質や材料、市場の変化によって動態的であるはずの刺繡を固定してしまっていると筆者は考える。たとえば筆者の調査地とする、西江を代表とする服飾圏に属している控排村の衣装についている刺繡は西江の刺繡と近いが、刺繡の色の組み合わせは西江とは明らかに異なっている。本発表は西江苗族の晴れ着である鳥貝（苗語、漢語表記、晴れ着）に着目し、鳥貝に付けられている刺繡の繡片を細分化し、さらに一枚一枚の繡片の技法、紋様、色を総合的に整理し、分析するものである。刺繡の技法、紋様と色をどのように組み合わせているのかを究明することで、西江苗族の刺繡の特徴を明らかにし、刺繡、衣装の地域差を示す。また、1960年代（人民公社）前後、1980年代（改革開放）前後、2000年代（観光化）前後および観光化の中の刺繡の技法、紋様、色の整理を通して、動態的な視点で西江苗族の刺繡の変化を明らかにし、現地社会における刺繡を動態的にとらえ、先行研究において見落とされてきた社会状況と刺繡の関係を明らかにしたい。

筆者はこれまで刺繡の研究において、刺繡の紋様は母系で継承される傾向があるかどうかを調査したが、5着の鳥貝の紋様、技法、色を整理するとともに、筆者が前後8回のフィールド調査で撮った繡片と比べてみたところ、調査地の刺繡には特に母系ごとに使用する紋様が固定されていないということ明らかとなった。西江苗族の女性は一般的に刺繡を最初に母から学ぶとされるが、居住地に近い女性との交流で刺繡を習得することもできる。特に結婚前は実家で親と一緒に住むため、刺繡の習得は母からの影響が大きい。SHの母A氏が1960年代前後に作った鳥貝の紋様は花、ザクロ、胡蝶を中心とし、技法は鄧繡を中心としたものとなっている。SHは1980年前後と2000年前後に新たに2着の鳥貝を作ったが、これには龍と魚紋様を中心に、ザクロと胡蝶紋様を襟、肩の部分と腕部分の小さい繡片に刺繡している。確かに彼女も鄧繡を中心として紋様を完成させているが、結婚後に嫁ぎ先で新たに刺繡技法を獲得することも多い。

キーワード　苗族、刺繡、紋様、技法、色

また、紋様、技法及び色の整理を行うなかで、刺繡糸の色の変化が時代ごとに異なることが明らかとなった。また興味深いことに紋様に対する色の変化は、紋様を施す女性自身の意思というよりも、刺繡する女性が使用する糸の残量によって決まることが明らかとなった。たとえば2016年の現地調査において筆者は、広場で刺繡をしている女性たちが作っている魚紋様（まだ鳥貝につけていない衣装の腕の一部分）が、紋様の色の特徴は同じ色トーンの糸を使っているが、色が魚の頭から少しづつ薄くなっていることに気づいた。この色の使い方は1960年代、1980年代の刺繡には見られなかつたものである。2000年代のSHの作った魚紋様の鳥貝にはこのような色の使い方が見えたが、青と緑青というグラデーションともいえる糸の組み合わせを使って色の変化を演出している。こういった色の変化は、糸の種類の変化によって生じているものである。1960年代から1980年代にかけて、西江は飢饉、人民公社、文化大革命を経験してきた。その時代において、糸の種類は非常に少なかった。YZY（1941年生、女性）は「私が刺繡を学んだ時、糸も自分で作っていた」と語る。すなわち1950年代頃に苗族の刺繡する女性は自分で刺繡糸を作っていたのである。そしてSH（1964年生、女性）とLWF（1972年生、女性）の時代になると定期市に刺繡糸を買えることになったが、色の種類はそれほど多くなかった。2000年代以降、特に観光化が進み、交通が便利になり、外部との接触が多くなった。技術的な発展によって、刺繡糸の種類はかなり増え、このような刺繡糸の色の種類の変化に応じて、苗族の刺繡も色彩的な変化が見える。

また、現地調査及び筆者が実際の刺繡体験から、苗族女性が刺繡している時、刺繡糸によって出来上がった刺繡の色彩的効果も違うことが分かった。というのは、苗族女性は刺繡の色の全体的なバランスを考慮しながら、紋様の細部に色の非対称である部分を意図的に作る。それは1本の刺繡糸は長さが固定されており、彼女らは1本の糸を最後まで使い切るためである。すなわち、刺繡における色の組み合わせは、彼女らの意図というよりも糸の残量により影響されているということである。